かたりべ 26

豊島区立郷土資料館だより

終始なごやかな雰囲気のなかで行われた6月4日の座談会のようす（2～4ページ参照）

新任にあたって

豊島区立郷土資料館長　小川欣治

四月一日付の人事異動により、郷土資料館の館長として勤務することになりました。前館長と同様、宜しくご指導のほどお願いいたします。

当館も、区民の皆様方のご協力、および職員の努力により、資料収集や調査・研究も徐々に充実して参りましたが、何分にも展示室、収蔵庫、研究室などが手狭になり、常に苦労が絶えず、〈快適な環境〉にはほど遠い状況です。

幸いにして、豊島区新公共施設整備中期計画には郷土資料館の移築が計画されておりますので、今年度より新館建設に向けて努力を傾注したいと考えております。諸先輩各位のご指導・ご支援のほどよろしくお願いいたします。

また、今年は区制施行60年という、豊島区にとって記念すべき年でもあります。記念事業として特別展「写真にみる豊島60年のあゆみ展」を来たる十月一日より開催する予定ですので、是非ご来館ください。

今後とも皆様方のご理解・ご協力を得、〝豊島区に現存する歴史・民俗・文化資料を後世の人々に少しでも多く遺しておけたら〟の思いを込めて、意義ある郷土資料館づくりをしていきたいと思います。

特集　新館設立に向けてⅠ　今後の地域博物館を問う（座談会抄録）

去る六月四日、勤労福祉会館において「豊島区立郷土資料館新館設立に向けて」と題して、郷土資料館主催の座談会が開催されました。

当日はお忙しい中にもかかわらず、大田区、葛飾区、杉並区の各郷土博物館の館長様がたに出席していただき、常設展示や収蔵庫のあり方について、および今後の地域博物館が果たすべき役割についてなどの問題を、座談会形式で話し合っていただきました。博物館の実務に即した具体的な話や、自らの経験談なども交え、終始なごやかな雰囲気のなかで進行することができました。平成九年度の新館開館に向けて動きはじめた郷土資料館職員一同にとって、非常に有意義な座談会となりました。

今回の特集では、二時間四〇分におよぶ座談会のうち、「今後の地域博物館はどうあるべきか」という問題についての部分を中心に紹介したいと思います。

なお、座談会の内容全文につきましては、来年三月刊行予定の『郷土資料館研究紀要　生活と文化』第七号に掲載する予定です。

座談会出席者（敬称略）

西岡　秀雄（大田区立郷土博物館館長）
関　忠夫（葛飾区郷土と天文の博物館館長）
朝倉　雅彦（杉並区立郷土博物館館長）
林　英夫（豊島区立郷土資料館運営委員長）
二ノ宮富枝（豊島区教育委員会社会教育課長）
小川　欣治（豊島区立郷土資料館館長）
秋山　伸一（同資料館学芸員　司会・調整）

これからの地域博物館について（その一）

林　最近郷土資料館というのは公園化しはじめてきたという傾向がありますね。そこで一番大事なことは、郷土資料館というのは研究の機関であるという基本的な姿勢をどこかで一本貫かないと、だんだん郷土資料館が児童のための、あるいは学校教育のための教育機関で、それは公園的なものということになってしまう。こういう発想に展開しないためには、学芸員をはじめとして自治体自身が、研究機関のひとつであることを認識しなければなりません。豊島区の場合は資料館運営委員会というのがあって、運営委員の先生方が（資料館の事業に対して）いじわるをしたり、ケチをつけたりする役割を果たしているものですからいいわけですが《笑い》、お役人がそのままきて館長をやっていますと研究的な要素を失ってしまう恐れがありますね。そのへんを理解できる状況を作りださないと、博物館が公園化してしまうという恐れがあるのではな

いかと思います。

西岡　これからの郷土博物館としては、小・中学校の先生がやれないこと、子供たちに見せたくても無理だというものについて、その手助けができる場所であってほしいと思う。教育委員会と話をつけて、必ず一回は来なければいけないと義務づけてしまうとかしてね。ただ、必ずいらっしゃいというようなことになると、近いところはいいけれど、遠いところの送り迎えをどうするかということが問題になる。それは別に教育委員会の方に下駄を預けて、うまく年間のプログラムを作って上手に来てもらうようにすればよい。

来館者のひきつけかたのテクニック

西岡　先ほど、常設展を見に来ないで特別展だけを見にくるという話があったんですけどね、実は特別展さえも見に来ない人だっているわけです。（そこで大田区では）最初の特別展のポスターから番号をつけて並べているわけです《「あれはいい！」の声》。そうしたら、「こんなにおもしろいものがあったのか！」とはじめて気がつく方もいるわけで、「もっと早くから来ていればよかった。」こうなるわけです。

友の会とのかかわり方

西岡　それからもう一つ。（博物館の職員だけでは）とても人手が足りないから、友の会というのがいるんだよね。それで今友の会は六〇人位いるかな、男女比でいうと同じくらいなんだけれども、学芸員だけでは間に合わない収蔵庫の資料整理をやってもらっているんだよね。行政の人たちが来るとやっぱり収蔵庫を見たがるんだよね、展示よりも。それであんまりゴチャゴチャになっているとかっこう悪いから、友の会の方に手伝ってもらうと少しは見やすくなるね。

司会　友の会の方はボランティアで参加されているのですか。

西岡　全くのボランティア。だから（勉強のために）私の話や学芸員の話をローテーションを組んで聞いてもらったり、ちょっと見学に行くとかね。お茶飲むような感じでね。

これからの地域博物館について（その二）

関　私が国立博物館におりました時の先輩が、山梨県の県立美術館の館長になって、私が訪ねていったわけです。これは立派な美術館ができたと思ったら、館長がいわく、「（このような施設は）いくら贅沢してもいいんだと思っている。なぜかといえば、これは県民のためのものだから、県民のために県のお金を使えばそれは県民に還元していることになる。だからいくら贅沢になってもいいんだ。」ということを言っていたわけです。これはひとつの考え方だなと思ったんです。博物館というのは（はじめから）多少限度（遠慮）があって、こんなに贅沢なことをしてしまったという気持ちがはたらきかねないんだけれども、これは区民に還元していくんだということからいうと、いくら贅沢でもいいんだ、許されることなんだ、と考えることが心要だと思う。

「地域博物館」という概念について

関　それともうひとつ。「地域博物館」という言葉は、わかるようでわからないんですね。地域の歴史なり文化なりが紹介され、それが区民の人たちに大いに勉強になるということでいいんだろうかということなんです。地域の歴史というのはもっと広範囲な地域、日本、あるいは世界、人類の歴史との関連があるはずだと。つまり、区の歴史をやるんだということではなくて、区の歴史というのをひとつの足掛かりにしながら、人類、文化というものを考えていくんだというような構想が一方ではたらいてくると非常に

いいんじゃないかということなんです。

朝倉　全く同じですね。（以前、杉並区の講演会で）「日本の神話」「正倉院」というのをやったんですね。フタを開けてみると満員盛況でしょ。みなさんはそういうことも求めておられるのだなということがわかったわけです。それまでは杉並に何か関係のあるものを、と思っていろいろさがしたわけですが、それからは全国的立場に立って考えようとしたわけです。そこだけで文化や歴史があるのではなくて、大きな交流があって、その町の文化が流れているわけですから。その町のことが基本的には大事だけれども、あまりこだわりすぎないほうがいい。豊島区の博物館だったら、豊島区のことは当然だけれども、豊島区だけのことで豊島区の文化というのは成り立っているのではないと思う。分をわきまえたうえでどんどん取り入れようと考えたらよいと思います。最近一生懸命考えていたことを、ズバリご指摘いただいたわけです。

案内図の必要性について

西岡　（館で発行する印刷物には）どんな場合でも、やっぱり略図（博物館までの案内図）はいれておかなければいけませんね。どこの駅を降りたら行けるのかわかるようにね。でも毎回のことだから、つい手を抜いてしまいがちなんだよね。

関　このあいだね、町田市の博物館に見たいものがあって行ったんですよ。はじめて行くところだから、地理的なことがよくわからないので行きは教えてもらったとおりタクシーで行ったんです。帰りは歩いてみようと思って、（途中に）交番があったんですね。交番でどうやって教えてくれるかなと思って寄ってみたんです《笑い》。そうしたら、「ここにパンフレットがあります。この地図でいいますと……」と言いながら教えてくれたんです。（パンフレット置場として）交番を利用するといいですね。

朝倉　それも全く同感です。杉並の郷土博物館は永福町駅が一番近いんですね。改札口を出ますとすぐに交番がある。そこに案内図を置いてもらっているんですが、これはいいですね。

これからの地域博物館について（その三）

関　区民の人たちともっともっと親しくなって、関心のある人が来たら館長室へ寄ってもらってお茶のみ話ができるようにしたいと考えています。私自身も外を歩くときに「こんにちは」と声をかけながら歩くようにしたい、じゃなくてすべきものだと思っていながらできないんです。というのは、葛飾という区は下町なんですね。メシが足りなくなったら隣の家へ茶碗一杯のご飯をもらいにいくというようなつきあいをして、街の雰囲気ができてきた。それにはとても私のような、別に上品に育ったわけではないんですけれども《笑い》、なかなか溶け込めない。そのことについては、「俺にはできないから、君たちできるだけ区民と親しくなっていくことを心掛けてほしい。」と（職員に）言っているんです。その場合豊島区という半分都市化した環境のなかで、そういう関係がどういうふうにしてうまくできていくか、これは区立の郷土資料館というものをつくりあげていく時には、一番基本的な姿勢だと思います。

小川　うちの方も、余裕があれば学芸員が、月に一回や二回街へ目的を持たないでプラッと出て、（途中で）ちょっと気になったらそのお宅にお邪魔してみる、そんなことが必要だと思っているんですよ。

〔本記事は、一九九二年六月四日に行われた座談会を、各先生方のご了解を得て掲載したものです。〕

一九九二年度　豊島区立郷土資料館事業予定

郷土資料館では、今年度次のような事業を計画しています。みなさまに親しんでいただける資料館にしていくため、各事業についてのご批判、ご感想をお聞かせいただければ幸いです。

特別展

◎写真にみる豊島60年のあゆみ展
会期　十月一日～十月八日（区民センター）
　　十月十一日～十二月十三日（資料館）
○会期中に特別展記念講演会、シンポジウムを開催する予定です。

◎（仮称）豊島の信仰――女性の祈り――
会期　二月五日～三月二一日
○会期中に特別展記念講演会、シンポジウムを開催する予定です。

地域史講座

◎江戸時代の古文書を読むII
日程　九月初旬～十月下旬（全八回）

◎（仮称）区境をあるく（フィールドワーク）
日程　三月上旬から下旬まで（全四回）

歴史講座

◎中世豊島氏の謎にせまる〔八ページ参照〕
日程　七月五日～二六日（全四回）

◎戦争を考える夏〔八ページ参照〕
日程　八月上旬から下旬まで（全三回）

刊行物

◎調査報告書第九集『集団学童疎開資料集(4)』
◎郷土資料館収蔵資料目録第六集
◎郷土資料館研究紀要『生活と文化』第七号
◎郷土資料館一九九一年度年報
◎郷土資料館だより『かたりべ』26～29号

整理・保存

資料館収蔵資料の整理、燻蒸も例年どおり行う予定です。

◎資料館収蔵庫の燻蒸（六月十四日～十九日）
◎旧宣教師館収蔵庫の燻蒸（九月初旬）
◎榎本家・菅野家文書の整理（通年）
◎寄贈・寄託資料の整理（随時）
◎受入れ図書の整理（随時）

郷土資料館事業の詳しい日程などにつきましては、「広報としま」や「かたりべ」に随時掲載いたしますのでご参照願います。

本年度も豊島区立郷土資料館をどうぞよろしくお願いいたします。

郷土資料館　なんでもQ&A

Q　豊島区の名前の由来となった「豊島氏」とはどのような一族だったのですか？

A　豊島区の名は、武蔵国豊島郡の名を引き継ぐ形でつけられたものです。中世においてこの郡に勢力をもっていた武士が豊島氏で、もちろん区域も勢力範囲に含まれていたと考えられます。このことから、豊島氏関係史料の収集・研究は、本区の中世史を解明するのに重要な意味をもちます。

資料館での中世豊島氏関係史料集の刊行は、調査・研究の成果の一端を示したものでありますが、区域では直接的な中世豊島氏の痕跡はまだ発見できていません。これは文明一〇年に石神井城が太田道灌によって落城させられ、豊島氏の勢力が衰えたことも関係していると思われます。

ところが雑司が谷法明寺には豊島氏一族の墓があります。いったん豊島郡から姿を消した豊島氏は、江戸幕府の旗本として返り咲き法明寺を代々の菩提寺にしたのです。また、この豊島（白井）氏からは有名な大奥中臈絵島がでています。しかし、復活した豊島氏も絵島事件で連座してお家断絶の運命となります。（則竹）

高まる水辺への関心

――「千川上水展」をふりかえって――

去る二月一四日から三月二九日までの会期で行なわれた「千川上水展」は、「失われた歴史的景観」という展示シリーズの一貫として実施された。この特別展では二四八一名の入場者を数え、三月一日と三月八日に行なわれたシンポジウムと講演会でも、それぞれ六〇名をかなり上回る参加者を得た。これは、区民の水辺や環境に対する意識が非常に高揚していることを示している。同時に、アンケートなどをみてみると、改めて水辺に対する関心が高まった、という感想を抱いた来館者もいた。このことは特別展を通じて、千川上水に関する資料や情報を当館に蓄積することができたと同じ程度の重要性を帯びた、展示の成果であるということができるであろう。

しかし、いくつかの今後に残された課題もある。今回の展示でも、特別展の開催期間中や終了後に多くの情報がよせられた。しかし、今回の情報は、展示の内容を深めるというよりも、欠落していた部分を補うといった要素のものが多く、基礎調査の不足ということを考えさせられた。特に、写真や文献資料などについては、他の自治体や資料保存機関、個人などから千川上水関連の資料の存在を知らされた。特に、他自治体が所有している未公開の写真や文献資料に対して調査することができなかった、という点は大いに反省すべきであろう。このようなことを考えると、他の自治体とも十分な連絡をとり、協力体制を整えた上で、相互補完的な情報交換が今後の課題となるものと考えられる。

このこと以外にも、展示やシンポジウム・講演会などの組み立てかたにいくつかの問題があるものと考えられるが、具体的な検討は別の機会に行いたい。

今後、これらの課題のうち、技術的な部分のものは、これからの特別展等での検討材料とし、資料的な部分で残された課題に関しては、展示という形態にするには若干困難なので、資料館の活動の中のべつな形態（資料集・調査報告書・地図集・研究紀要など）で発表していきたい。

（伊藤）

講演会講師による展示説明

来館者の声から

◎用水の展示という切り口には興味深くおもいました。古い時期の写真がおもしろくよく集められたとおもいます。地図や現状の調査が多く過去と現在を対比してみられたのでわかりやすかった。（三〇歳女性）

◎ゴミ捨て場となっている千川上水が印象(的)、全部人間がしたことなのです。どうすれば川をきれいにできるのか。（一八歳女性）

◎(前略)テーマを一つにしぼって頂くと知識不足のため理解しやすく思います。(五八歳女性)

◎古い資料がよく集められている。現在の地図のどこと、どう対応するのか、水車がどこにあったか分かる地図をつけて下さると調べながら歩いてみたいと思います。（五八歳男性）

◎我々の先祖が生活に必要な水の確保について当時の工夫をした様子が感じ取れました。我々が子孫のために今後どの様なことに気をつけなければならないのか考えてみたいと思います。（五八歳男性）

連載　一点の資料から《その1》　珍しくない「借金証文」のはなし

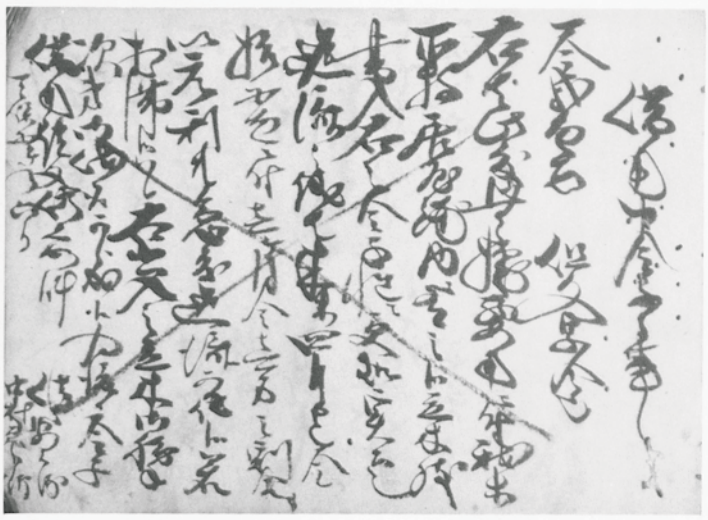
以前、埼玉県のある町に史料（古文書）所在確認調査に入った時のことである。ある旧家に伺い、ご当主にその家に伝わる古文書の有無について質問したところ、「イヤー、うちには江戸時代の借金証文くらいしかなくて……。恥しくてとても見せられないよ。」という答が返ってきたことがある。すなわち、そのご当主は、江戸時代に自分の先祖が他人から借金したことを恥じているのである。果たしてそうであろうか？借金証文は借主の家に残るのであろうか？

写真の史料は、雑司が谷の柳下家（江戸時代雑司谷村の名主家）に遺された「（萬覚帳）」というかなり分厚の帳簿のなかに所収されているものである。「借用申金子之事」という表題から、いわゆる借金証文であることがわかる。その記述から、①天保五年（一八三四）六月に安兵衛、中村平兵衛が金二〇〇両を借りる際に作成したものであること、②自屋敷内の立木を借金の担保（抵当）としていること、③元金および利息合計の返済期限を、翌年の四月としていること、などが知られる。受取人（貸主）は記されていないが、柳下家に伝わる「（萬覚帳）」に記されていることから、同家が貸主と考えるべきであろう。

このように、借金証文は借主が「たしかにお金をお借りしました」という証拠として、借主側で作成して貸主に対して渡すものである。昔ながらの旧家が多くの借金証文を伝存している場合、金銭を貸す立場にあった方が一般的である（ただし、証文の控えを借主が持っている場合もある）。そして、その家に証文が残されているのは、貸した金銭をいまだに返してもらっていないためである。

さて、写真の史料には、文面全体に大きな×印が記されている。これは、貸した金銭が返金され、この借金証文自体が反古（無効）になったことを意味する。おそらく、証文の原本も返金された段階で借主に返却されたか、あるいは廃棄されたものと考えられる。一見無造作に書かれた×印にも、その証文が有効か無効かという重要な意味が込められているのである。すでにお気づきのように、こうした証文類のやりとり方法は、現在でもほとんど変っていない。

このように、決して珍しくない、しかも書式がほぼ決まっている一通の借金証文からでも、当時の人間関係や文書のやりとりの様子をある程度類推することは可能である。われわれは、一点の資料がピピッと発する信号や情報をなるべく正確に読み取り、それを後世に伝えていくことが必要なのではなかろうか。資料の歴史的価値は、決してその稀少性や珍しさだけに限定すべきではないのではなかろうか。（秋山）



柳下貞之家第8号文書「（萬覚帳）」所収

豊島区立郷土資料館からのご案内

★刊行物発刊のお知らせ

◎『豊島区地域地図　第五集
——近世（村絵図Ⅰ）編——』

正徳六年（一七一六）の下高田村絵図、および明和九年（一七七二）の雑司が谷村絵図の二点を、カラー印刷で複製しました。付録として読みおこし参考図と絵図解説を付し、くずし字の読めない方でも理解しやすいように編集してあります。

江戸時代の高田・雑司が谷地域を考える際には、きっとお役に立つと思います。是非お買い求め下さい。（一五〇〇円）

★刊行物増刷のお知らせ

①『豊島区地域地図　第一集　近代後期（町全図・区全図）編』（一九八七年初版発行）

②『豊島区地域地図　第三集　近世（江戸切絵図）編』（一九九〇年初版発行）

③特別展図録『失われた耕地—豊島の農業—』（一九八七年初版発行）

在庫切れの右記刊行物を、若干の文字訂正を行い増刷しました。

この機会に是非お買い求め下さい。

（①一〇〇〇円　②二〇〇〇円　③三〇〇円）

★歴史講座開催のお知らせ

◎中世豊島氏の謎にせまる——『豊島氏編年史料Ⅰ』を読む——

＊会場　勤労福祉会館四階第四会議室

＊時間　午後二時から四時まで

＊定員50名（事前申込みのこと）＊費用　無料

※ただし、テキスト代一六〇〇円は必要です。

日程	テーマ（仮題）	講師
7月5日（日）	豊島氏と南北朝内乱	小林　一岳氏（越生町史編さん室）
7月12日（日）	豊島氏と毛呂氏	稲葉　継陽氏（立教大学大学院）
7月18日（土）	豊島氏と武士団	蔵持　重裕氏（一橋大学講師）
7月26日（日）	武蔵豊島氏と紀伊氏	桜井　彦氏（宮内庁書陵部）

◎戦争を考える夏（上映会・見学会）

＊日程　八月九・二三・三〇日（全三回）

＊会場　勤労福祉会館4階第3会議室

＊時間　午後2時から4時まで

＊定員30名（事前申込みのこと）＊費用　無料

編集後記

梅雨空のうっとうしい毎日が続きますが、みなさま如何お過ごしでしょうか。

「かたりべ」二六号をお届けします。今号から紙面を八ページに倍増し、内容を一新、各号に三ページ程度の〈特集〉、〈Q&Aコーナー〉、〈連載記事〉を盛り込むことにしました。今年度発刊する四号分についての〈特集〉は、「新館設立に向けて」を統一テーマにしていきたいと思います。次号以降にも是非ご期待下さい。

＊　＊　＊

六月中旬の郷土資料館収蔵庫の燻蒸に伴い、収蔵展示室内の展示替え（学童疎開と戦争関係中心）を行いました。夏らしく〝衣替え〟を終えた収蔵展示室のようすも是非ご見学下さい。

かたりべ
・
No.26
・
1992年6月30日
発行
・
豊島区立郷土資料館
・
豊島区西池袋2-37-4
・
電話03－3980－2351